

---

# スペース

石橋 望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スペース

### 【Nコード】

N6205A

### 【作者名】

石橋 望

### 【あらすじ】

僕が一体何をしたと？本当に勘弁してください。確かに僕は地球で一番足が速くて、一番力が強くて、スポーツ万能だけど……。そんな事とは関係なく僕を巻き込まないでくれよ。いやいや本当に僕は怪我人なんです。のんびりと暮らしながら、久しぶりの余暇とりハビリに専念したいだけなんです。準とウォールのトンデモコメディー――！

## プロローグ『激動の宇宙』

「クソッ！ もっと早く救援を呼んでいれば……」

一旦隕石群に身を隠したウォールは軽く舌打ちをしてから再び右腕に付けているコネクタに向かって叫んだ。

「こちらはウォール、頼む応答してくれ！」

（ザー……ガガ……ピ）

空しい機械音が耳に付いているイヤホンから流れた。

「全く……、こんな貧乏クジなんか引きたくなかったよ！」

またもや軽く舌打ちしてからウォールは何かを覚悟したように隕石群から飛び出した。

特A級特殊防護スーツは太陽風でボロボロ、常用酸素供給マスクも、もう長くは持たないだろう。

決死の思いで飛び出したウォールを見計らっていたかのように巨大な棍棒のような物が横なぶりに襲い掛かってきた。

不意を突かれたウォールは巨大な棍棒のような物の直撃を喰らい、まるで美しい放物線を描いたホームランの様に吹っ飛んだ。

慣性の法則で飛び続けるウォールの眼前に何か人工物の破片が迫って来た。恐らくスペースコロニーから剥がれ落ちた電力パネルの一部だろう。

ウォールはくると前転すると破片に着地して一気にジャンプして、なんとか体勢を安定される事に成功した。

そうしてからもう一度、神に祈るような思いでコネクタに向かって叫んだ。

「……………！」

そこで初めてコネクタが壊れている事に気付いた。恐らく先ほどの一撃で完全にやられてしまったのだろう。

ヒューマノイド型生命体は触覚などが付いていない為、声でしかコミュニケーションをとる事が出来ない。

しかも宇宙と言う空気の無い環境では、声紋認識コネクタがないと声自体が発せられないのである。

「……………！」

ウォールは三度、軽く舌打ちした。

それから程無くしてウォールの意識は完全に途絶えてしまった。

## プロローグ『激動の宇宙』（後書き）

この小説を読んでくださった方々、初めまして。  
最近、小説に興味を持ち始めて、趣味程度にと書いています石橋望です。

一応タイトルが『スペース』となっておりますが、決してSFではないのでご注意ください。

本当はSFを書きたかったのですが、とても私にはそのような技量は無く、話を練っている途中から路線変更したのは言うまでもありません。

このプロローグだけエセSFになってしまいました…。

そういった経緯から、せめてタイトルだけはSFっぽくと思い、短絡的に『スペース』と付けてしまいました。

私は書くのが亀の歩みのように遅いので、無事に完結できるかどうか分かりませんが、長い目で見てやってください。

一言でも良いので、感想や評価を頂ければ幸いです。

## ブローグその二『激動の地球』

(……パンポーン……パンポーン)

(……パンポーン……パンポーン)

一定のリズムで呼び鈴が鳴ったと思うと、何の躊躇もなく玄関のドアが景気良く開いた。

家賃三万程度のアパートの玄関は、とても玄関と呼べるような場所ではなく、靴置き場と表現したほうがしっくりくる。

「足之本さん、お荷物ですよ！」

常識人からすると明らかに住居不法進入な宅配業者は、右胸にスペースシップのロゴがデザインされたパイロットスーツを身に付けており、おでこの辺りに亜光速宅急便とデジタル表示されているヘルメットらしきものを頭に被っていた。

あしのもと 足之本 じゅん 準は別段、驚いた様子も無く玄関へと軽く走って業者を迎えた。

爽やかな黒い短髪、適度に焼けた小麦色の肌、そこだけ見ればいかにも健康そうだが、長身痩せ型な体格に加え、常に眠たそうな一重まぶた。

別に機嫌が悪い訳でもないのに、「もしかして機嫌が悪いの？」と人によく言われるような青年である。

「ロウさん、お元気でしたか？」

ロウと呼ばれたその宅配業者は軽く会釈をした。

「指紋の確認、お願いします」

勝手にドアを開けて玄関へ入ってきたロウは悪びれた様子も無く、覇気のある声で準に指紋の確認を促した。

届いた荷物は紙パックでなければダンボールでもなく、小型冷蔵庫のような形をしている。

上辺には指紋認証パネルが付いており、準が右手の人差し指を軽く置くと「パンパカパーン!!」という大げさなファンファーレが鳴り、ほぼ同時にロウがいつの間にか取り出していたクラッカーを炸裂させた。

「おめでとうございます、あなたの指紋が見事に認証されました!」

「毎度の事ながら、それはどうも」

準が冷静に切り返すと、ロウは信じられないと言った表情で準の両肩を揺さぶり始めた。

「ちよつと、ちよつと……なんで落ち着き払ってるんですか!?!」

「ひいいやあ、もお慣れええましいたいあ」

なんだかよく分からないハンドパワーで、準はコンニャクのように揺れている。

「私共、亜光速宅急便は単に荷物をお渡しするだけではなく、お客様との積極的なコミュニケーションをです……」

「うそおれえはあ以前にいもおお聞いきいまああしたあい」

「だったらもう少し盛り上がってくださいよ!」

準はなんとかロウの手を振り解くと「だから強要はやめて下さい」と肩で息をしながら言葉を捻り出した。

「あつ……申し訳ありませんでした」

準がこの辺境惑星に移住してきて以来、顔見知りと呼べる人物はロウぐらいしかいない。彼は亜光速宅急の辺境回り担当で、荷物を届けに来るのは大抵の場合は彼である。

多い時には月に四、五回は荷物を届けに来るのだが、ここ一ヶ月ぐらいは来てなかったので準は話し相手が居らず、内心寂しかったのである。

「ところで、この星の重力にはもう慣れました?」

ロウが他愛も無い話を切り出す。

「さすがに慣れましたよ、最初は体が浮いている感じでしたけど」

「私なんか結構頻繁に荷物を届けに来ますけど未だにどうも……」

「惑星間連合が定めている平均重力の七〇パーセントしかないですからね」

靴置き場でしばらく話してからロウは「また来ますね」と言っ、外に色彩粒子でカモフラージュして停めてあったスペースシップに意気揚揚と乗り込んだ。

『たとえ体が碎け散るうとも亜光速で届けます、荷物とか信頼とか』この会社のセンスを疑いたくなるような標語らしきものが機体側面に書いてあるスペースシップは、空中で静止すると亜空間へと消え去った。

「さてと……」

「散らかっているクラッカーでも片付けるか」

何故自分がクラッカーを片付けなければならないのかという釈然とした疑問があったが、準はさっさと片付けると届いた荷物を部屋へと運んだ。

小型冷蔵庫のような形をした荷物の取っ手を持ってゆっくりと開く。すると中からいかにもらしくドライアイスのスモーク的なものがフワフワと漂いだした。

……というか演出用のドライアイスである。

「……ロウさん、やり過ぎです」

クッション材と一緒に入っていたドライアイスを取り出すと出てきたのは、なんだか怪しい錠剤やら液体の入ったボトルやら。

それらを更に取り出すと、一番奥に二センチ四方のカードが入っており、表面には銀河標準文字で『愛のビデオレター』と書かれていた。

準が怪しい雰囲気が漂う『愛のビデオレター』を自らの腕に装着されている再生機に差し込むと、顎ヒゲを蓄えた男性とツインテールの幼い女の子の二人が空中に映し出された。

「久しぶりだねウォール、お父さんだよ」

「ちよっとお父さん！！ お兄ちゃんは今、アシノモトジュンって



名前なのよ！」

「ああそうだったね、アワノナカジョンか」

「違うわよ、ア・シ・ノ・モ・ト・ジ・ユ・ンよ！」

「ああそうだったね、アジノモトジャンか」

「……………」

「久しぶりだねアジノモト、お父さんだよ」

「お兄ちゃん久しぶり！」

「お前が重症を負ってからもう半年になるのか。どうだそっちの星は？ 辺境だが空気が澄んでいると病院の先生から聞いている。順調ならばお前の怪我も大分良くなってきている筈だ」

（………… パンポーン………… パンポーン）

「あ、すまんがミュン出てくれないか？」

「ええ〜！………… 私もお兄ちゃんに話したい事あるのに」

「今晚ナクドナルドのハンバーガー買って来てやるから」

「私ナクドナルドよりマスバーガーの方が食べたい！」

「分かった、分かった、買って来てやるから」

（………… ドタドタドタ）

「え〜、少し話が逸れてしまったがお前の怪我が…………」

（お父さあ〜ん！ 町会長のジンおばさんが三丁目のゴミ屋敷問題で話があるからって来てるよ〜！）

「ああ、母さんは今日ムーンウォークの講習会に行ってるから、また明日にでも来て下さいってジンさんに言っといってくれ〜！」

（はあ〜い！）

ピッ！

準は何の躊躇も無く再生機の停止ボタンを押してカードを取り出

した。

これ以上『愛のビデオレター』を再生してしまうと、余計自分の怪我が悪化してしまいそうだった。

足之本 準……本名、ウアー・ウォールは第六十二太陽系に属するゾイと言う惑星の出身のゾイ星人である。

ゾイは年間平均気温が二十三度、夏が長いがちゃんと四季が存在するリゾート惑星で、原住はヒューマノイドのゾイ星人である。

ゾイ星人は他の生命体に比べて肉体が極端に発達しており、ヒューマノイド型生命体の中ではトップクラスの筋力を誇る。

それ故に殆どの彼らは男女関係無く惑星間連合組織という軍隊にエリートとして入隊し、銀河の平和を脅かす野生宇宙怪獣や凶悪な種族と日々闘っているのである。

もちろん殉職者や怪我人が少ないとは言えず、今回の準のように宇宙怪獣とのタイマンでギツタンギツタンに叩きのめされて重症を負うケースも日常茶飯事だった。

準は全身打撲、両肩亜脱臼、頸椎骨折に加え、腰から下はとても比喩出来ないようなぐちゃぐちゃの状態でアンドロメダ総合病院へと担ぎ込まれた。

一時は心配停止状態までいったが、医師たちの懸命な努力、死に物狂いのリハビリ、家族の励ましによって何とか日常生活が苦にならない程までに回復したが、まだ職場には復帰できないと言う事で医者に紹介してもらった辺境未開惑星『地球』にリハビリと休暇を兼ねて移住してきたのである。

地球はゾイ星と気候風土が非常に似ているが、重力がゾイ星の半分程度で空気中の成分に含まれる酸素がゾイ星の二倍である為、怪我や病気の自然治癒に非常に適した脅威の惑星なのである。

ちなみに未開惑星である為に本来は移住できないのだが、地球原住の黄色人種、とりわけ『ニホンジン』という種族がゾイ星人の容姿と酷似していた為、特別に上からの移住許可が下りたのである。

「えっと……、光子錠剤が三錠に、絶対零度飲料を軽量スプーン二

杯分と……」

準は届いた荷物の中に入っていた薬をブレンドして一気に飲み干した。

「……辛いし痛い」

薬は苦いか甘いというのは地球人のいかにも未開惑星らしい偏見であって、全宇宙的に見れば薬と言うのは辛いかなのである。しばしの悶絶の後に「よしっ!!」と意気込むと準は着替えて靴を履いて勢い良く玄関を開けた。

「今日から中間テストだっ！」

準は地球人年齢だと十八歳であった……。

## プロローグその二『激動の地球』（後書き）

この小説を読んでくださった方々、初めまして。  
最近、小説に興味を持ち始めて、趣味程度にと書いています石橋望です。

一応タイトルが『スペース』となっておりますが、決してSFではないのでご注意ください。

本当はSFを書きたかったのですが、とても私にはそのような技量は無く、話を練っている途中から路線変更したのは言うまでもありません。

そういった経緯から、せめてタイトルだけはSFっぽくと思い、短絡的に『スペース』と付けてしまいました。

さて『激動の宇宙』は、この『スペース』という作品全体のプロローグという位置付けですが、今回の『激動の地球』は地球人、足之元 準としてのプロローグという位置付けで書きました。

まだSFが名残惜しいのか、コメディとしては中途半端な感じだと自覚しております。

ともかく私は書くのが亀の歩みのように遅いので、無事に完結できるかどうか分かりませんが、長い目で見てやってください。

一言でも良いので、感想や評価を頂ければ幸いです。

## 第一話『丸永商店街』

言うまで無く中間テストは散々な結果であった。

勉強の内容が古過ぎて、先生が何を言っているのか分からない事があるものの、化学や数学なんてどこの星も一緒である。

日本語は地球に来る前にちゃんと勉強していたので何とかなる。準にとって問題は社会やら英語なのだ。

日本の社会、歴史も日本語と同時にある程度の勉強はしてきたはずだったが、『黄金の国ジパング』とか『鬼ヶ島』とか『スペースインベーダー』とか全く出てこなかった。

英語も理解不能。日本語でさえやっとな読み書き出来るレベルなのに、とてもではないが外の国の言葉など覚えられるはずなどない。

「なんで惑星全体で共通語じゃないんだ……？」

まあそれも未開惑星では当たり前前の事なのだろうと思いつながら準は丸永商店街を歩いていていた。

この商店街はコロッケや掻き揚げなどの安くて美味しい惣菜屋が多く、夕方には金欠ハングリーな地元学生たちでとても賑やかになる。

準もそんな賑やかな一人である。

いつものように五十円のポテトコロッケを口の中でホクホクさせていると、

「足之本 準！ 帰宅途中の買い食いは校則で禁止よ！」

後ろから急に呼ばれたのと、聞き覚えの無い声に呼び捨てにされた二段の驚きで準は体ごと振り返る。

一瞬、燃えるような夕日で視界が遮断されてしまったが、よく目を凝らすとそこには女性が仁王立ちしていた。

「あなた、足之本 準でしょ？」

腰まで伸びた長い黒髪、どこか猫を連想させるつり上がった目、すらりと伸びた華奢な腕と足。

女性はどこか人を馬鹿にしたような笑みを浮かべている。

「な……何？」

警戒しながら準はゆっくりと半歩下がる。

「そんなに引かないでよ、ホラ」

女性は当り触りの無い自分の胸を指差す。その胸の部分には私立鷹野目高校の校章がパッチしてあった。

「あなたと同じ高校」

「……だから何？」

そんなの見れば分かると言わんばかりに準は冷たく切り返す。

しかし女性も相変わらずの不適な笑みで続けた。

「名前は桜庭 さくらば 鈴鹿 すずか、風紀委員長よ」

「いやいや、風紀委員長様でしたか……買い食いしてゴメンナサイ！」

準はマッハの速度で謝ると、マッハの速度できびすを返しクラウチングスタートから秒速六百メートルの速度を持つ脚力で逃げ出した。

「き……消えた……」

もちろん普通の地球人には秒速六百メートルの生物の姿など見えるはずも無く、鈴鹿はポカンと立ちすくむ。

しかし、しばらくしてまた不敵な笑みを浮かべて呟いた。

「足之本 準……噂通りね」

マッハで逃げ出した準はアフリカのナントカ族も真つ青の動体視力で人の波を見事に交わしながら……、

（……って、ちよつと待てよ）

前方に人がいない事を確かめて準は両足を思い切り地面に着いて急ブレーキをかけた。靴とアスファルトが摩擦で擦れる音が周囲に響き渡り、煙を後方に撒き散らしながら準は止まる事に成功した。

恐らく今ので靴底が一センチ近く擦り減っただろう。

足元から煙が出ている人間が唐突に出現したことに周りの学生や主婦らしき人達がざわつき始める。

（おい、あいついきなり出てきたぞ！）

（何あれ、煙みたいなのが……）

（不機嫌そうな顔してるな）

（きつといきなり現れては足元から煙を撒き散らす新手の変質者よ！）

（警察に電話したほうが……）

（いや、あの煙を見るよ）

（なるほど、消防か）

準は好き勝手にゴチャゴチャ話が盛り上がっている周りの目を気にしながら呟いた。

「何で僕にだけ注意するんだ、アイツ？」

よくよく考えてみれば、鷹野目高校の生徒は周りに山ほどいる。みんな何か食べたり飲んだり、商店街のゲームセンターで遊んでいる生徒だって沢山いる。

「それに僕の名前も知っていたし、いきなり呼び捨てだし……」  
そんな事を悠長に考えていると、

（ウウーウウー……、ピポポパポ）

誰かが本当に電話してしまったのか、もしくは近くの交番に駆け込んだのか、パトカーがやって来た。

「どこだ！ 体中のありとあらゆる穴から光化学スモッグを撒き散らしている不機嫌な透明人間は！」

パトカーから降りてきた警官はなんだかよく分からない事を叫びだした。

どうやら色々と脚色された挙句、誤情報が伝わったらしい。

準は嘆息して警官の前に歩み出て言った。

「それは多分僕の事です。たしかに機嫌は悪いかも知れませんが、光化学スモッグを撒き散らした覚えも無ければ透明人間でもありません」

「じゃあ何だ？」

「えゝ……それはですねえ……」

「よし、逮捕」

警官はここぞとばかりに手錠を取り出す。

「何でいきなり逮捕なんですか！？」

準は目玉が飛び出んばかりの勢いで警官に言い寄った。

「見るからに怪しいからだ」

「怪しくないでしょ別に。見て下さいよ、普通の高校生ですよ？」

「普通ならいきなり現れたり、煙を撒き散らしたりしないと思うが？」

たしかに警官が言っている事は正論である……逮捕の件を除けば。この警官ならば補導ぐらいは平気でしそうな勢いだ。

準はしばらく黙り込んで考えた挙句、やっぱりクラウチングスタートの体勢に入った。

「ちよつと待ちなさい」

私立鷹野目高校の風紀委員長、桜庭鈴鹿が群集をかき分けて風のようにサラッと現れた。

両手に一個ずつ五十円のポテトコロツケを従えて。

「そっちこそちよつと待て……」

準はワナワナと体中を奮い立たせて言った。

「何だその両手のコロツケは！？」

「さっき買ったのよ」

「そういう事じゃなくて、買い食いは禁止だつてさっき……」

「確かに校則では第四章、登下校時における諸注意に引っかかるわね」

「いやだから、あんた風紀委員長で、さっき僕にだけ注意して、買い食いは禁止だつて、みんなしてるのに……」

「そうね、ちよつと面白そうだから注意してみただけ」

「……………」

準と鈴鹿との緊迫したやりとりに野次馬たちは息を飲む……が、



「とりあえず、どっちでもいいから逮捕させてくれ。何だったらジヤンケンで決めてもいいぞ」

何だか手柄の欲しそうな警官が話しに割り込んできた。

「うるさいわ!」

準と鈴鹿のダブルアップが警官の顎に炸裂した。

言葉では表現できないような快音を残して警官は五メートル近く舞い上がり、空中できりもみ回転してから地面に落ちてきた。

服はボロボロ、顔はグシャグシャ。とても可哀相な事になっている。

野次馬の誰かが救急車を呼んで、別の誰かが仰向けにのびている警官の両足を持って引きずっていった。

「彼は職務を全うしたわ……、立派な殉職よ」

鈴鹿の一言に準も含めてその場にいる全員が「ウンウン」と頷いて手を合わせた。

## 第一話『丸永商店街』（後書き）

この小説を読んでくださった方々、初めまして。  
最近、小説に興味を持ち始めて、趣味程度にと書いています石橋  
望です。

私は書くのが亀の歩みのように遅いので、無事に完結できるかどうか  
分かりませんが、長い目で見てやってください。  
一言でも良いので、感想や評価を頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6205a/>

---

スペース

2010年12月9日14時41分発行